

第3回エコパークゾーン環境保全創造委員会 議事要旨

日時：平成19年11月19日(月) 14:45～16:45

会場：アイランドシティ中央公園体験学習施設ぐりんぐりん

出席者：小島会長、青木委員、内田委員、岡本委員、包清委員、田村委員、逸見委員、
迎委員、吉松委員

オブザーバ：国土交通省九州地方整備局港湾空港部海洋環境・技術課長 長掛 哲弘
環境局環境対策推進部長 (代理 環境調整課満生係長)

議事要旨： (◎：会長，○：委員，□：事務局)

(資料1 エコパークゾーンの現状 事務局説明)

- ◎：アオサ回収による窒素・リンの回収は全体から見るとかなり小さい。
- ：アオサかりんとうほどのくらいの量のアオサを使用しているのか。
- ：名島の海岸の岩に生えているものを30kg～40kg ぐらい使用している。アオサ試験農園で行っているアオサの堆肥化では、海域回収したアオサをH18年度で30トンぐらい使用した。
- ：堆肥化以外にも、海域回収のアオサは不純物が少ないため、実験材料として需要があり、エネルギー回収の他、アオサ中の保湿成分などの有効成分をクリームに使用するなど、様々な有効利用を検討している。
- ◎：アオサの発生量の調査方法はあるのか。
- ：過去に推定したことはあるが、精度的に問題があった。精度の良い調査方法は今のところない。
- ：博多湾または東部海域をよくしていくためには、溜まった窒素・リンをどうやって除去するかであるが、覆砂して溶出を抑えるのか、底泥を取り除くか、アオサなどの形で取り除くのかしからない。実際のアオサ回収による窒素・リンの回収量はかなり少ないことが分かった。
アオサについては、海域は別として、干潟に堆積すると底生生物が酸欠で死んでしまうため、干潟に堆積したものは回収するしかない。
- ：栄養塩の除去をノリの栽培やアサリ育成などの環境教育につなげていきたい。
- ：干潟に堆積したアオサも、維持課が回収している。
- ：海域回収に約3千万円かかっているが、他に費用対効果のよい方法がないかご検討いただきたい。
- ：健全に潮干狩りができる状態になってほしいと思うが、アオサなどとの関係があるのか。
- ：人口増加に伴って栄養塩負荷が高まり、赤潮の発生範囲が広がり、有機物が海底に溜まって底質が悪化してきた。今後は下水道の窒素の高度処理を実施していこうとしている。
- ：アサリについては、ゴールデンウィークなど潮干狩りのピーク時には1日5千人程度が見られ、持ち出し量も1人平均2kgとして、一日で10トン程度持ち出している。また、業者がアサリを採りに来ていることから、アサリはかなり多いのではないか。
- ◎：漁業権があったときは、アサリの漁獲量はどのくらいだったのか。
- ：博多湾の水産統計がある。

- ◎:データがあれば、次回提示してほしい。
- :香住ヶ丘には、昔カニがたくさんいたが、最近は見ない。海水（水質）の関係なのか。
- :アサリについては、潮干狩りで採りすぎている気がする。きちんと管理すればいいのではないか。カニについては、食用としてはガザミ、モクズガニなどがいるが、生息域が狭くなっているため、数が減っているのだろう。
- :カキを養殖して市民に開放することは可能か。
- :昔はカキ打ちをしていたが、今はカキを採らなくなったので、こんなに増えたのではないか。イカダにぶら下げる方式は問題なくできると思う。博多湾は重金属等を扱う工場がないので、安心して食べることができる。アサリ、カキ、ノリ養殖については環境教育にも良く、いいことだ。
- :業者がアサリを多量に採っていると地元の方から聞いた。業者の採取を禁止できないのか。
- :漁業権がないので禁止できないが、採取方法は制限されている。
- ◎:エコパークゾーン水域利用検討委員会で関係者が集まり、検討をしているところである。
- :窒素・リンの低減としては、これまでも下水道の高度処理などいろいろな施策を実施している。逆にとらえると、これまでにない取り組みをしていかないと改善は困難ということだ。今後は生物浄化手法が期待されるが、窒素・リンを吸収した生物を系外に出さないといけない。資源管理をして定常的に取り出せば、水質改善につながっていくのではないか。
- :下水の高度処理については、今のところ福岡市ではリンは除去しているが、窒素の除去はわずかである。
- :【資料1】 p 6の高度処理導入率は福岡市だけの割合なので、流域下水道も含めた博多湾への流入量を100%として計算すべきである。
- ◎:できる範囲で、資料を示してほしい。
- :福岡県の下水道高度処理による窒素・リン同時除去は7%程度で、福岡市は2%程度、博多湾全体としては4%程度である。

(資料2 護岸整備事業の評価 事務局説明)

- :香住ヶ丘の緑地保全地区は、崩落しかけており、危険である。散策などを行っている人も多いので、なんとかしてほしい。
- :塩浜護岸の江戸時代の築堤は、埋め込みになっているが、後世に伝えていく必要があるのではないか。
- :伝えていく工夫は今後考えていきたい。
- ◎:五丁川の右岸には石碑もあったが、これも含めて考えてほしい。
- :まだ供用されていない塩浜護岸が一番ゴミで汚れていた。清掃ボランティアも入れないのが原因と思うが、供用開始はいつからか。
- :20年度で整備完了予定なので、20年度末には供用したいと考えている。
- :御島崎の辺りは昔汚かったが、今日視察してみてきれいになっているのに驚いた。人間が汚したものは、人間がきれいにしないといけないことを実感した。
- :【資料2】表中の「環境面の効果」の「人の利用」部分については、ただ潮干狩りなど

が増えただけでなく、潮干狩りの人数が増えたことで、潮干狩りを通して博多湾を知る機会が増えたなど、散策が増えたことで市民が海岸線を認識する機会を増やしたなど、状況を生み出したことを環境面の効果とした方がいいのではないか。

◎：【資料 2】の表現を検討してほしい。

(資料 3 総合評価(案) 事務局説明)

- ：野鳥公園のその後の展開はどうなるのか。
- ：和白干潟ゾーンの核となるものであり、和白干潟ゾーンと一体的な整備を考えている。
- ：アイランドシティ（以下、IC）の護岸などについては言及していないが、なぜか。
- ：エコパークゾーン整備基本計画は、海岸環境整備事業とシーブルー事業が原型だったため、ICの護岸を含んでいない。
- ：IC護岸も人が海に近づきやすいようになっているので、評価に取り入れた方がよい。海岸性の植生も貴重なので、評価にいれて欲しい。
- ：ナマコは岩場の生物で、タイラギも砂地の生物ではない。他にも御島の底質の記述などで整合していない部分がある。また、エコパークゾーン整備基本計画とのつながりが分かりにくい。
- ：整理する。
- ◎：ゾーニングについて、ICゾーンが必要ではないか。可能であれば、ゾーニングを検討してほしい。
- ：ゾーニングの大きな枠組みについては、前回説明があり、ゾーンの範囲としてはICが含まれており、ゾーン名称に「IC」が入っていないということではないか。
- ：ゾーニングは、（例えば和白干潟ゾーンが核で、海の中道、香住ヶ丘ゾーンがそのバッファゾーンであるというように、）相互関係が重要である。
- ：全体の方向性があるからこそそのゾーン毎評価であると思う。それから、例えば御島ゾーンではIC側と御島側で景観が統一されていないなど、適正な景観管理の仕組みが必要ではないか。全体でもゾーン毎でもよいが、「適正な景観管理の仕組み」や「景観創造の仕組み」などを入れてほしい。
- ：全体の方向性・評価は、最後のとりまとめにでてくる。
- ◎：例えば水底質の改善には覆砂・アマモ場の造成など、項目毎に実施の施策をあげた方が分かりやすい。今後の方向性についても、水底質の改善、環境教育、景観管理といった項目に分けることができる。また、総括にゾーン毎の課題がはっきりと書かれていないため、(1)エコパークゾーンで実施した環境保全・創造施策の評価と(2)ゾーン毎の今後の方向とのつながりが悪い。
- ：表ではなく、文章の方がよい。
- ：意見としていただき、反映させていきたい。

(資料 4 その他 事務局説明)

- ：生物生息環境改善実験の目的は何か。
- ：和白海域では夏季に水深 2m 以深で海水中の溶存酸素濃度の低下（以下、貧酸素）が確認されている。水深 2m より浅くすることで、底生生物の逃げ場所をつくり、回復が早く

なることを期待している。

- ：潮汐により湧昇流がおこり、貧酸素水塊が表層へ上がってくる可能性があるので注意が必要であることと、周辺より底質がよくなるため、慎重にやらないと、貧酸素の影響を回避したためなのか、底質がよくなったためなのか、わからなくなる。
- ：ご意見を参考に慎重にデータを取りたい。
- ◎：今年度実施した潮流調査と一体的な調査なのか。
- ：潮流調査とは時期が離れているが、和白海域の貧酸素調査に関連した調査である。

◆次回の日程は H20. 3. 27 (木) で調整

<終了>